た。だが著者は，それがアイルランド時代，大好きだった伯母（父の姉）キャサリン・エルウッド夫人のことだと何の説明もなしに断定している(p. 167) のである。

このように，ハーンをアイルランド側に引き寄せようとするあまりか，セツやローザに関する部分には根拠の乏しい，著者の一方的な思い入れだけによると感じざるをえない記述が多くて，読んでいて驚かされる。

さらに残念なのは，著者がアメリカとアイルランドで緻密な資料調査を行いながら，他の欧米のハーンの研究者の場合と同様に日本の資料や研究書は英訳のあるもの以外，全く参照していないことである。本書には平川祐弘氏による丁寧な Introduction があるが，平川氏の優れた小泉八雲論をマレー氏は読んではいない。「滞日経験があって日本の言葉にも文化にも通暁している」のなら，平川氏の著作にも，他の日本側の第一級資料にも当然目を通すべきであったろう。そうすれば，ハーンの晩年が本当に「孤独で淋しい」(p. 22) ものだったかどうか，セツとの夫婦関係に関しても，著者は違った印象を持つにいたったかもしれない。

本書は，これまでのハーン研究に欠落していた「アイルランド」という視座の重要性を強く提示して刺激的であり，資料面でも貢献するところ大である。ただし，はたして著者自身がのべるように，このままで「個人的，歴史的，国家的偏見を排除した」ハーン評伝の “authentic original” といえるかどうか。著者の解釈の是非に関しては，さらに今後の総合的な検証の結果にゆだねられるだろう。

外人の夫に当惑した事柄を列挙したもの」(p.141) と説明する。ハーンを雑司ヶ谷墓地に葬ったこと，葬儀の時に子供に着物ではなく洋服を着せたことなどはハーンは望まなかっただろう (p.303) と考え，アイルランドのケンナード女史が異母妹アトキンソン夫人を伴って1909年に来日してセツに会い，ハーンの年来の希望どおりに，一雄を欧米で教育する可能性について質した時，即座に断られた事，ハーンの遺書はないと言われて見せてもらえなかった事，また野口米次郎はハーンの書斎が生前そのままに保たれていると感動的に記していることについて，ほぼ同じ時期にケンナード女史が訪ねた時には，ハーンが特別にいれたガラス窓やストーブが取り外され，ハーンの収集品もビスランドやマクドナルドの写真も物置にすべて仕舞いこまれていたことに気付いたということも付け加えている (p.317)。

総じて、著者の目は，ハーンのアイルランドの親族に好意的で，妻セツやギリシャの母ローザには厳しく冷淡である。

父チャールズと“illiterate foreigner” (p.226) であるローザとの結婚およびその後の別離までのいきさつや二人の性格についても，弟ジェームズや異母妹，親類の意見などを引いて，著者は何かとチャールズ側を擁護する。そしてハーンが父を終生憎んだとされることをも，著者は、ハーンがシンシナーティ時代に書いた心霊現象を取材した記事から，その時すでに父を許していたと考える (p.232)。一方，ローザが里帰りしてギリシャで生んだ次男のジェームズをまもなくアイルランドに送り帰したのは，どんな事情があったにせよ，母として理解できない異様な行為だと非難し (p.226)，ローザの激しい気性と“mental illness”は幼いハーンの心も時に傷つけ，いいしれぬ恐怖感をうえつけたにちがいない，ハーンが子供の頃、お化けにうなされ，長じては怪談を好むようになった原因かもしれぬ (p.227) とまで言う。さらには，ハーンの「夏の日の夢」の中に，青い空とあふれる光の中，“大切なひと”に愛された幼い日々を詩的に語った印象深い有名な一節があるが，それはギリシャの母の記憶を語ったものと従来はされてき

く，できればイギリスで教育したいと考え，手紙でその方策の相談をしていた (p. 284)，という事実を著者は列挙する。

また，その頃の異母妹への手紙は，他の文通相手とは異なって，優しさと親愛の情にあふれており，ふたりは子供の写真を交換し，おとぎ話を送ったりした。「妹はハーンにとって，同じ子供の頃の世界への掛け橋，絆であり，セツには理解したくてもとうていかなわない，その世界にハーンはますます心を寄せつつあった」(p. 194) と著者は述べる。

だが，ハーンが一雄の教育のためであれ英米圏に帰ることは，セツたちを捨てることである。著者はハーンの家庭生活のことに書き及び，晩年のハーンの心がますます祖国と祖国の妹の方に傾くなかで，セツがそのようなハーンと対決の姿勢をとっていたかのように描いていく。

異母妹のミニー・アトキンソンとの文通がハーンの方から一方的に打ち切られたという事実に関して，空の封筒だけを送り返すなどというのはハーンらしくない，ハーンからの最後の手紙は温かく，和やかなもので絶交を予想させないことから，従来言われてきたようにハーンが仕事に没頭したために返事を書かなかったのではなく，あるいは，セツがハーンが里心つくのを恐れて，妹からの最後の手紙をハーンに見せなかったのではないか，空の封筒は，もう接触してくれるなという意味だったのではないかと疑う。そしてこうした微妙な事柄については日本人はそつなくこなすものだ，という (p. 149)。

ハーンは一雄を手元に置いて自分で英語教育を施していたが，健康状態の悪化のために一雄を欧米へつれていくのをやむをえず諦めると，すぐさまセツがその機に乗じて一雄を日本の学校に入学させた (p. 297)，とも述べている。

著者の目には，ハーンとセツの夫婦関係の齟齬ばかりが映るらしい。子供の数に関して，ハーン自身は一人以上は望まなかったがセツたちに押し切られた (p. 191) と述べ，セツの『思い出の記』についても，「風変わりな

ハーンの話を伝記作者たちが繰り返していったにすぎないという (p. 255)。さらに，一時期フランスの学校で教育を受けたとハーンが述べていることにも著者は疑義をはさむ。フランス語の会話力があったかどうかは不明であること，すぐれた翻訳はむしろ自国語の能力によるのであって，翻訳をする程度の語学力はアイルランドとイギリスでの教育でも充分ついたはずだということ，フランス時代のことが晩年の回想文の中に描かれていないこと，などの理由をあげて，おそらくは子供時代の記憶をなるべくアイルランドやイギリスから切り離したいという心理からでたハーンの作り話だろうと推測する (p. 253)。

そして，そのような気持にハーンが結果的になった理由として，ブレナン夫人が親戚のモリヌークスの方を贔屓にしだしてからハーンの待遇が悪化したこと，また，聖カスバート・アシャー校での寄宿生活に入ってから強烈で濃厚な宗教体験をもたされ，それまでのブレナン夫人の“wealthy indifference” (p. 262) とのあまりの違いから，反動が生じたことを挙げている。フランスでの学校教育の有無については，たしかにその時期や場所がはっきりしないため，これまでにも疑問はもたれてきた。だが，ハーンが残している自伝的な文章を全面的にただ“脚色された作り話”と断定できるものだろうか。

著者によれば，ハーンの晩年を支配したのは，日本研究を究めたいという思いと同時に，日本を離れたいという強い思いであった (p. 283)。

在日アイルランド人の間ではハーンの人となりがいかにもアイルランド人らしいとみなされていたらしく (p. 285)，本人もロンドンの日本協会のオスマン・エドワーズ氏への手紙に，「私はイギリスというよりはアイルランド人なのです。アイルランドに，少なくともしばらくの間，行きたいと半分思うのです」と書いた (p. 285)。そしてハーンは，いろいろなつてを使って，アメリカで大学か雑誌社での職を探そうとし (p. 296)，西洋人の風貌で「不思議なアイルランドなまりのある」長男一雄への思い入れが深

て夫人が宗教的にも極めて寛容で教養豊かな人物だったこと，そして晩年のハーンの心がアイルランドに向かっていたということである。本書の評伝としての構成自体，まずハーンの渡米から始まり，アメリカ，日本，ときて最後の数章に，ギリシャでの誕生からアイルランドの子供時代を持ってきたのも，そこにクライマックスがあるためにちがいない。

著者はまず，ハーンがセツの一族を引き受けて大家族の長となりえたのは，ダブリンのブレナン夫人の邸宅での，主人がいて召使もいてという秩序ある生活を思い出して心落ち着いたからだという (p. 146, 156)。そしてそのブレナン夫人について，従来，倫理道徳に凝り固まった厳しい性格で，過度の宗教心がハーンの子供時代に暗い影響を及ぼしたとされてきたことに対して著者は繰り返し反論し，いかに好ましい生活環境だったかを強調する。夏には海辺の避暑地で楽しい休暇をすごし (p. 245)，いたずらっ子のハーンは夫人を困らせたが，お気に入りの子供で，ハーンも夫人になつき，いつもそのあとをくっついて歩いていた (p. 246)。部屋にギリシャ正教のイコンが掛かっていたことは夫人の宗教的寛容性の証であり，書斎には夫人の教養の豊かさを示すような広い分野にわたる蔵書があってハーンは自由に読みふけることができた。ハーンに地獄の恐怖を教えたというカズン・ジェーンも，冷静にハーンの記述を検討すれば，決して病的な人ではなく，むしろ，教養があり，親切で善意にあふれた女性に他ならない，と反論し (p. 250)，名前ではなく“The Child”としか呼んでもらえなかったとハーンは回想しているが，アイルランドでは愛情をこめてそう呼ぶのだと説明している (p. 238)。

では，なぜ，これまで不幸な幼年期のイメージが流布していたのだろうか。著者は，初期の伝記作者たちの偏見に加え，ハーン自身が晩年に自分の子供時代を意図的に脚色して語ったために，ダブリンでの生活やブレナン夫人に関する誤解が定着してしまった，ハーンは「伝説の創作に加担」(p. 247) したのだと言うのである。神学教育を無理強いされたというのも，

適応するのは「アイルランド人には無理だ」と述べていたこと (p.97)，晩年の手紙に「自分はイギリス人というよりはアイルランド人なのです」と記している (p.285) ことなど，一貫してアイルランド出身としての意識をもったハーンの姿である。アメリカで長年住んだ後も英国国籍を捨てなかったことは故国への愛着へを示す (p. 192) と著者は言う。

ついでハーンの資質や思想行動もアイルランドの精神風土や地域的特性との関連で説明がなされていく。例えば，怪奇幻想趣味や民俗・民話への関心がハーンだけでなくイェイツやレ・ファニュなどにもみられるように，Anglo-Irish の文学伝統のひとつであることが指摘される。そして，アイルランドですでにハーンの精神形成がされており，もしずっと故国に留まっていたなら，きっとアイルランドのフォークロアに没頭していたにちがいない，という (p.32)。著者は，西洋に対抗しようとする日本のナショナリズムにハーンが理解を示したことも，ダブリンの革命家の動きになぞらえ (p. 154)，新旧せめぎあう明治という時代の中で“旧きもの”の保存を訴えたことも，アイルランドの知識人と似ているという (p. 139)。ハーンには庶民的なものを強く好む傾向があったが，そのことについて著者は次のように述べる。ハーン自身は貴族的な資質の男で，ページ・ベーカー，エリザベス・ビスランド，チェンバレンなど上流階級の人と好んで親しく付き合い，西インド諸島でも親しかったのはエリートだった (p. 100)。一方，中流階級の者とは肌があわずに嫌い，そのためクレビールやグールドなどとは結局絶交した。そして，庶民には心を寄せるが中流を嫌うというのはアイルランドのジェントリー階級の考え方なのだ (p. 61)，と。このようにアイルランド，そしてケルトの視点からの分析は，これまでのハーン研究にはあまり見られぬため，興味深く読むことができる。むしろ，ここにもっと頁をさいて重点的に論じるべきではなかったのではないか。

だが，著者が最も熱弁をふるい，力説するのが，ダブリンのブレナン夫人の邸宅で過ごした子供時代が裕福で幸せなものであり，従来の説に反し

(p. 181) であると評価する。チェンバレンは日本の文化も国力も過少評価し，政治状況も把握できず，またイギリス本国が先をよんで日本を新興勢力として認めていこうとする動きも理解できなかった。それを見ぬいたハーンは，チェンバレンを途端に尊敬しなくなったばかりか，“ironic contempt”さえ感じるようになって，後年の訣別にいたったのだと著者はいう (p. 181)。

チェンバレンではなくハーンの方に日本研究者としての軍配を上げることは，日本では平川祐弘氏が主張してきたことだが，少なくとも欧米では特に第2次世界大戦以後まず考えられなかったろう。その点で，著者の捉え方は注目に値するし，最近のハーン再評価の流れの一つの表れとも思える。

これまでの欧米のハーン伝の多くが，来日以降の部分になると途端に生彩に欠けてしまうのは，その作者が日本のことをよく知らず，せいぜいハーンの足取りを辿って日本を旅行したことがある程度だからだが，その点，マレー氏の場合，外交官としての日本滞在経験は，少なくともハーンの日本論の是非の評価においては，他にない強みとなっている。実際に暮らしながら，日本の文化や社会を観察し考える中で，自分の日本理解をハーンの日本理解に重ねあわせていったという自信に裏付けられているのだろう，著者の論述には迷いがない。

そしておそらく，ハーンの理解力の深さにそのように感服した時，ハーンの伝記や研究の中で，あまりにもアイルランドのことがないがしろにされているか，または暗く否定的に描かれていることに，同じアイルランド人として義憤を感じたのに違いあるまい。そこから著者は，ハーンとアイルランドの関係の再検証に乗り出す。

まず明らかにされるのは，ハーンがパトリックの名を捨ててラフカディオを名乗るようになるのは従来言われているように渡米と同時ではなく，ニューオーリンズ時代からであることや，西インド諸島の熱帯性の気候に

釈者としてのフェノロサに対する不信感を表明しており，ふたりの親交はフェノロサ側が一方的に記しているだけで (p. 185)，実際は疑わしいという。アイルランドのハーンの一族や先祖の事蹟については特に詳しく，財産関係にいたるまで役所の公文書などから報告されている。

もうひとつ特筆すべきは，著者がハーンを評価するのが，ハーンの作品の文学的詩的側面においてではなく，もっぱら日本文化・日本社会の研究者としてであり，ハーンの分析の鋭さと先見の明に注目していることだろう。

ハーンがこれまでは "a poetical writer, but a practical idiot otherwise" (p. 14) と常にみなされてきたと著者が述べるのは，少なくとも欧米においてはほぼ事実である。アンソロジーの類は印象記や再話作品中心に編まれてきたし，また来日に関しても，西洋文明世界からのハーンの逃避行と放浪の行き着いた先とのみ欧米の研究者は見なして，ハーンの日本理解がどうであったか，その価値を検討することは少ない。だが著者は，「ハーンの日本論は今なお的を得ており，これまで日本について書かれた中でも最良のものである」(p. 14) と断言する。

たとえば，ハーンが，古くからの神道的なものの考え方こそが連綿と続く日本文化の核だと考えるに至ったこと，ハーンのそのような基本的な日本観，特に庶民への温かい眼差しは晩年でも変わらなかったこと，"新日本" を単純に嫌ったのではなく新旧の混在する時代の姿を見極め，新しきものの中にも旧きものが生き残っていくと確信していたこと (p. 190)，などが積極的に評価されている。さらに著者は，B.S. チェンバレンとの，日本音楽観の違いや不平等条約改正をめぐる意見にも着目する。そして，高名な日本学者であるはずのチェンバレンが旧弊な帝国主義の幻想に囚われて偏狭な考え方を露呈したのに対して，チェンバレンより滞日期間も浅く，日本語もろくにできないハーンの方が，今日的視点では明らかに "more enlightened" であり (p. 153)，"clear-sighted, modern figure"

をめぐるものであり，著者はこの通説を覆して新しいハーン像を描き，「個人的，歴史的，国家的偏見を排除した」ハーン評伝の“authentic original”(p. 23) を提示しようとする。本書はいわば，アイルランドという視点から大幅なハーン再考を図る野心的な試みなのである。

全体で十六章からなるこの評伝は，まず渡米後のハーンが若き新聞記者として活躍したシンシナーティ時代から始まる。著者はハーンの作品内容の分析など文学面にはあまり立ち入らない。もっぱら手紙類を資料とし，人間関係の推移を軸に，ニューオーリーンズ，西インド諸島をへて日本の松江，熊本，神戸，東京と，丹念にハーンの生活と足取りをたどっていき，最後の数章に，ギリシャでの誕生からアイルランドのダブリンでの子供時代を置いている。

評伝としての本書の長所は，細々とした新しい資料や事実の発見が全編に渡っているという点だろう。著者はアメリカにも赴任していたのか，アメリカ各地の大学図書館などに埋もれていたハーンの手紙など MSS 資料をはじめ，関係者同士の書簡やハーンに関する同時代の新聞記事，投稿文や書評，追悼文，出版社に残っている資料など，実に念入りに調べ上げて引用している。アイルランドでの新資料の発掘もある。

その結果，例えばアメリカ時代については，人間関係や事件の経緯が従来以上に立体的に浮かび上がり，印税収入の額なども具体的で，他にも細々とした新しい指摘がなされている。また，来日後のハーパーズ社との絶縁に関しては，同伴の画家ウェルドンがハーパー氏やパットン氏にあてた手紙などを引いていて興味深い。来日当初の状況も，「東洋の土を踏んだ日」に描かれているような心はずむ日々ではなく，実際は，雨天続きで，ハーパーズ社ともグールド氏とも一方的に絶交するという，職業の面でも私生活の面でも波瀾ぶくみの不安定な時期だったことがわかる (p. 136)。晩年のフェノロサとの親しい関係についても，ハーンの方はアトランティック・マンスリー誌の編集者スカッダー氏にあてた手紙に日本解

書　評

A FANTASTIC JOURNEY by Paul Murray, Japan Library, Kent, 1993, 379pp.

牧　野　陽　子

1890年に来日し，後に帰化して小泉八雲の名前で知られるようになった作家ラフカディオ・ハーン（1850-1904）はこれまではもっぱら日本で評価が高かったが，最近とみに欧米でも見直しが始まり，新しく作品集や評伝が次々と出版されている。

昨年刊行された本書も，ハーンの人生の“Fantastic Journey”の跡をたどった評伝だが，ハーンがアイルランド人であることに焦点を当てて書かれている点が，従来のハーン伝にない，最大の特色である。著者は「滞日経験があって日本の言葉にも文化にも通暁している」(R. F. Foster による前書き，p. xi) アイルランドの外交官である。そして序論にあたる第一章“Discovering Hearn”で，研究のきっかけをこう述べている。

“I began researching this book in the early 1980s because I could not reconcile the intelligence, and astonishing modernity of Hearn with the caricature of much of what has passed for his biography.” (p. 14)

つまり，著者の意図は，ハーンの“intelligence, and astonishing modernity”を評価した上で，“the caricature of much of what has passed for his biography”に異を唱えることにある。著者がいう“the caricature”とは，主として，ハーンがアイルランドで送った「不幸な幼年時代」